

パブリック・コメント実施結果

（案名：「第3次ツキノワグマ保護管理計画（案）」及び「第3次カモシカ保護管理計画（案）」についての意見募集について）

平成25年1月22日

1 意見募集期間

平成24年11月30日（金）～ 平成25年1月4日（金）

2 実施方法（実施したものに丸印を付しています。）

（1）周知方法

実施	内 容
<input type="radio"/>	行政情報センター、行政情報サブセンター等への資料配架
<input type="radio"/>	県ホームページへの資料等掲載
	説明会の開催（県内 〇 ヶ所、計 〇 名参加）
<input type="radio"/>	報道機関への発表
	県の発行する広報紙等への掲載
<input type="radio"/>	印刷物の配布
<input type="radio"/>	その他（広聴広報課ツイッター）

（2）意見受付方法

実施	内 容
<input type="radio"/>	郵便（持参を含む。）
<input type="radio"/>	ファクシミリ
<input type="radio"/>	電子メール
	公聴会又は説明会（会場における聴取）

3 意見件数及び対応状況

（1）意見件数

受付方法	意見提出人数（人）	意見件数（件）
郵便（持参を含む。）	7	13
ファクシミリ	5	17
電子メール	5	26
公聴会又は説明会		
計	17	56

※ この他、県外からも、392名の方からご意見をいただきました。

（2）決定への反映状況

区 分	内 容	意見件数（件）
A（全部反映）	意見の内容の全部を反映し、計画等の案を修正したもの	5
B（一部反映）	意見の内容の一部を反映し、計画等の案を修正したもの	1
C（趣旨同一）	意見と計画等の案の趣旨が同一であると考えられるもの	18
D（参考）	計画等の案を修正しないが、施策等の実施段階で参考とするもの	22
E（対応困難）	A・B・Dの対応のいずれも困難であると考えられるもの	10
F（その他）	その他のもの（計画等の案の内容に関する質問等）	0
	計	56

※ 意見内容及び検討結果については、別添「意見検討結果一覧表」をご覧ください。

【担当】環境生活部自然保護課（野生生物担当）
電 話 019-629-5371（内線 5375）
FAX 019-629-5379
Email（代表）FA0031@pref.iwate.jp

意見検討結果一覧表

番 号	意 見	類似意見 件数 (件)	検討結果（県の考え方）	決定への 反映状況
1	【ツキノワグマ】6 ページ 図：繁殖域と生息域に分けられているが繁殖域の定義が不明です。説明ありませんし、また、繁殖域を定義する必要性およびその方法自体に疑問を感じます。		子連れの捕獲情報、目撃情報があつた場所を繁殖域として地図を作成していますが、ご意見の通り繁殖域を定義する必要性が薄いこと、年によっては子連れでの行動範囲が広がり、正確な繁殖域では無いことなどから、繁殖域の記載はしないこととします。	A
2	【ツキノワグマ】10 ページ 発生件数：岩手県の出没状況は北上と奥羽で傾向が異なる事が知られております。②発生場所 以降では北上と奥羽で分けていますが、①の「年度別発生件数」の図も棒グラフの中を色分けすべきかと思ひます。12 ページの「月別発生件数」の図も同様。		ご意見の通り、表現を修正します。	A
3	【ツキノワグマ】保護に必要な適正頭数について明示すべき。	2	適正頭数については科学的な推定頭数を基に保護管理検討委員会でも議論が始まったところですので、今後検討していきたいと考えます。	D
4	【ツキノワグマ】ツキノワグマに関する現況について、里山への拡大が目立ってきており、「集落、市街地の裏山にもクマがいるのが当たり前」となりつつある。これは科学的根拠が十分であり、もう少し強調して記述すべき。この傾向は今後もさらに増加すると思われ、この認識は今後の計画の中でも重要な立脚点である。		ご意見の通り、表現を修正します。	A

5	【ツキノワグマ】ツキノワグマの個体数推定は、分布が一樣でなく、移動及びトラップへの誘引率が個体としても季節・年度により異なる大変難しい問題。また、パラメータの設定によっても結果は大きく異なる。3300 頭という結果は大規模な調査によるもので、信頼度は高いと思われるが、推定に用いた設定仮定と年度、モデルの設定くらいは記載したほうが良いのでは。		ご意見の通り、調査方法・推定方法についてももう少し詳しく記載します。	A
6	【ツキノワグマ】安定的な維持とは何を基準にしているのか疑問。管理計画の中に森やクマの実態調査を組み入れ、狩猟による捕獲や防除の他に対策を立て、自然も動物も人間も共存できるような計画とできないものか。		環境省の基準（特定鳥獣保護管理計画作成のためのガイドライン：クマ類編）によれば、個体群あたり 800 頭以上を安定存続地域個体群としており、岩手県の両個体群ともこの基準を大きく上回っております。また、クマの餌となる堅果類の調査やクマ個体数の調査は、今後も継続的に行なっていきましますし、捕獲以外の集落環境整備なども市町村等と協力し実施していきまします。	C
7	【ツキノワグマ】防除意識啓発について、賛同し、積極的に取り組みたい。			C
8	【ツキノワグマ】地域住民は保護よりも捕獲を優先すべきとの声が大半である。また、高齢化により防除対策が満足に行えないような集落も多く、保護を行うのであれば保護担当部局による何らかの支援も実施するべき。		被害防除には地域集落で可能なことから取り組んでいくことが必要であり、集落ごとに状況等が異なるため、どのようなことができるのかなどの検討を含めた、きめ細やかな被害対策を、農林担当部局や市町村、専門家とも協力して実施していきたいと考えます。	C
9	【ツキノワグマ】市街地や農地に出没した際に積極的に捕獲することを、実施するか否かはともかく、検討するべきではないか。		出没時の捕獲対応の条件については、生息状況や被害状況の変化等も踏まえながら検討していきまします。	D

10	<p>【ツキノワグマ】奥山に入ってからまでの捕獲は望まないが、農業被害、人身被害に対しては即猟銃による駆除が安全確保のため必要である。被害者が忌避剤、柵等の対策するのは疑問。共存は被害がない段階での話であり、頭数より被害数で保護管理を考えてはどうか。</p>		<p>クマによる人身被害の発生の危険性が高い場合などの捕獲体制の整理など、クマによる危険の防止がスムーズに行える体制づくりを今後も進めていきます。クマは行動範囲が広いと、中山間地などには有害捕獲を行なっても、被害対策を実施していないと別のクマが出没するなど、クマによる被害は減少しないため、有害捕獲のみでなく、被害防除対策を行う必要があります。推定頭数だけでなく、被害数についても重要な指標であることから保護管理を行う上での指数として使用し、効果的な被害対策を検討していきたいと考えます。</p>	D
11	<p>【ツキノワグマ】出没が近年増えている。その原因は、銃所持者の減少、クマの利用の減少、過剰な自然保護意識、山林労働者の高齢化、クマの絶対数の増加、などが考えられる。クマの捕獲数の増加に賛成する。</p>		<p>本計画では単純にクマの捕獲数を増やすものでなく、保護と被害防止を両立するために、様々な取組を行なっているものであることをご理解ください。</p>	C
12	<p>【ツキノワグマ】 P20 8 保護管理の実施 (2) 具体的施策 ②個体数管理 イ捕獲許可の方針 (イ) 許可の制限 (a) 予察的な捕獲は許可しないについて、上段の「(ア) 捕獲についての方針」においては、人身への危害が発生する可能性が非常に高いときについて捕獲を認めるとしている一方で「予察的な捕獲」はしないとしていることに表現の整理が必要と考えられること。ついては、以下のような追記をするとういのではないかと。 (a) 予察的な捕獲は許可しない。ただし、人身への危害が発生する可能性が非常に高い場合を除く。</p>		<p>予察捕獲とは、恒常的な被害等の発生が事前に予察される場合で、被害等を最小限にするため、被害発生前に実施する捕獲です。里への出没などにより、人身被害の危険性が高い場合などに行う捕獲は予察捕獲には該当しないため、案のとおり表記したいと考えます。</p>	E

13	<p>【ツキノワグマ】生活環境地帯内に侵入したクマは、基本的に即時捕獲許可が出る様に基準を見直すことを要望する。曖昧な基準の為、住宅地の中に侵入したクマに対しても何らの対応が取れない等、住民が不信に陥らない様に統一性を求める。一例ですが、本年10月中旬午前6時30分に私が住む住宅地(戸数150軒)の中心部に100kgほどのクマが侵入し散歩中の住民と2～3mで遭遇しました。後15分ほどすると学童が通学するコースです。しかしながら自治体では『被害が無いので』と何らの対応もありませんでした。住民から自治体窓口へ抗議をしましたが曖昧な回答があるばかりでした。人身事故が起きていないのでと云わんばかりの呆れた対応です。これは基準がハッキリしていないのではと考えます。又、頻繁に担当者が代わり許可基準の認識が甘いことも要因にあると考えます。具体的に指導することも要請します。</p>		<p>緊急時の捕獲許可については、住宅等敷地への侵入、日常生活の範囲内での人身被害の場合に限って、市町村に捕獲許可権限を移譲しており、迅速に捕獲が行えることとしています。しかし、ご意見の通り、実際に市町村による捕獲許可を行った例は少ないのが現状です。 今後は、市町村が許可を行える場合についてマニュアルを整理するなど、市町村による適正な捕獲許可が出せるよう、適切な運用に努めていきます。また、上記以外の緊急時には広域振興局による口頭許可により迅速に対応が可能ですので、周知の上、適切な運用に努めていきます。</p>	D
14	<p>【ツキノワグマ】人身被害と農業被害の軽減について、捕獲は人身被害が発生する可能性が非常に高い場合とされており、山村の者にとっては期待するところだが、予察捕獲を認めていないことから、安心して生活する状況は望めないものかと思う。 農林業被害についても、クマ被害により経営が困難になり廃作をしたところもある。電気柵だけでは被害は防げない。冬眠明けの予察捕獲を実施するべき。</p>		<p>人家の敷地内への出没などの危険性の高い場合や、被害対策を行なってもなお農業被害が継続する場合には、従来通り捕獲を認めております。しかし、クマは行動範囲が広く、被害防止対策を実施しないと、被害防止のため予察捕獲などにより捕獲を行なっても別のクマが出没し、根本的な被害防止にはつながらないと考えます。</p>	E

15	【ツキノワグマ】県全域への天然林の保全が記載してあるが、林業経営の立場からは、天然林では生活ができない。冬眠明けの予察捕獲により人の住む地域とクマの住む地域を明確にする必要がある。それによりクマに人を見たら逃げろということを教え込み、クマと人との緩衝帯を明確にすることが重要と考える。		ご意見の通り、クマに人の怖さを教えることは重要だと考えます。しかし、緩衝帯に出没するクマを捕獲しても、クマが出没しやすい環境であれば、再度別のクマが出没してしまい、被害防止にはつながらないと考えます。そのため、緩衝帯についてはクマが生息しにくくなるような環境整備を行うべきであると考えます。	E
16	【ツキノワグマ】農作物の生産地や酪農等の経済動物を支える地域は「クマの生息地ではないよ」と制裁を加えることを前提に、区分けをする必要がある。		農業や酪農に被害を与える個体については、従来通り有害捕獲による適切な対応を実施していきます。また、ゾーニングの考え方にに基づき、耕作地周辺の里山や耕作放棄地を管理し、農地や集落にクマが出没しにくい環境を作っていく事も重要であると考えます。	C
17	【ツキノワグマ】保護管理計画の目的は「人身、農林被害の撲滅」であり、このことをどこかで強調してもらいたい。市町村担当者によっては「クマ問題＝駆除」と捉えているが、対処療法的なものであり、問題解決には多くの方策が必要であることを認識して欲しい。		ご意見の通り、表現を修正します。	A
18	【ツキノワグマ】野生動物と人間との関わりには予防原理を働かすことであり、このことを明示する必要がある。また、有害捕獲の要件にもこの原理が働いているかを見極める必要がある。また、箱ワナの問題のクマの選択的駆除を目的とする使用については異論はないが、そのためには①わなの誘引餌は被害作物と同じもので、はちみつ、蜜蝋は使用しない②わなの設置は電気柵で囲われた内部被害場所とする。などの条件を加えるべき		ご意見の通り、有害捕獲に至る前に、十分な予防対策を実施する必要があると考えます。ご提案の箱ワナの使用条件については、捕獲許可要領へ記載することを検討していきます。	D

19	【ツキノワグマ】猟友会について、本来狩猟を趣味とする人々であり、有害駆除を全面的に依存する体制は好ましくない。駆除自体は行政の仕事であり、広域振興局ごとにガバメントハンターがいるのが理想的。狩猟者の高齢化と減少、長年続いてきた駆除のあり方では被害が減らない現状をみれば、そろそろ猟友会の保護計画における長期的展望によるあり方を考える時期ではないか		有害捕獲については、今後猟友会のみでなく、鳥獣被害防止特措法に基づく実施隊を中心とした取組となるよう、体制を整えていきます。	D
20	【ツキノワグマ】岩手県の人工林率は 44%にも達しており過剰です。県は生息地の復元を第一目標として急ぎ、被害防除を徹底させて、クマを殺さないでクマ問題に対処するよう願います。	2	人工林の針広混交林への誘導の推進や、緑の回廊の設定などの生息地保全の取組を実施していきます。また、被害防止についても、誘引物の除去や緩衝帯の整備など、捕獲以外の効果的な方法を実施するよう取組を継続して行います。	C
21	【ツキノワグマ】近年の里山の現状（住民の減少、耕作放棄地の増加、コナラ属の高樹齢化等）はクマにとってプラスに作用しているが、草原性、半自然草原性の生物の多くは衰退の一途をたどっており多様性が損なわれている。本計画の緩衝帯の整備はやり方次第で本来の生物多様性を取り戻す良い機会となり得る。このような観点で環境整備の考えを意識していただきたい。		ご意見として参考にさせていただきます。また、緩衝帯の整備については、これまで管理を担ってきた住民の高齢化・減少、里山利用の減少など整備に向けて大きな課題がありますが、取り組んでいく必要があると認識しています。	D
22	【ツキノワグマ】クマの住む豊かな奥山、水源の森を次世代に残す。 山の奥に木の実などのなる林郡をつくる。		クマの生息地である奥山の環境について、整備に努めていきます。	D

23	【ツキノワグマ】子グマから母グマを奪わないでください。お母さんがいないと子グマは生きていきません。人間の知恵でどちらも共存できることを考えてください。失ったものは2度と元通りにはなりません。クマが里に降りてこなくてもいいように皆で力を合わせて考えていきたいです。		クマが里に降りて来ないように、今後も生息地の整備や誘引物の除去などの取組に努めていきます。	D
24	【ツキノワグマ】管理年次について、学習効果は小さいと見積もられ、効果があったとしても1年で消えるわけでないで、学習を期待できるから管理年次を変更するのは理屈が通らない。 ハンターの多くは有害駆除をやりたくないと考えているが、狩猟を優先することで、ハンターのモチベーションを上げることは考えられるので、管理年次の変更には反対しないが、管理年次の変更理由を県民が納得できる形で明記するべき。また、狩猟を先に行った場合、捕獲の自粛ができず捕獲上限が意味をなさなくなる可能性がある。捕獲上限を超えたら翌年の捕獲上限を下げるなどの対応が必要。		ご意見として参考にさせていただきます。また、従来より、管理年次内の捕獲数は次年度の捕獲上限に反映させていますので、今後も引き続き実施していきます。	D
25	【ツキノワグマ】捕獲数の管理年次を猟期が始まる11月15日とすることは、狩猟を確実に保証することで、後に続く有害駆除は止められず、過剰捕獲を招くだけなのでやめてください。現行どおり4月1日から捕獲数をカウントしてください。	2	狩猟期の銃による捕獲行為により、ツキノワグマに人の怖さを学習させる効果や、狩猟による個体数調整機能が期待できることから、人身被害等防止の観点からも狩猟は必要であると考えます。また、11月からの保護管理年次とした場合にも、捕獲上限に達した場合などは有害捕獲を含めた自粛要請を行うなど、適切な個体数管理を実施していきます。	E

26	【ツキノワグマ】狩猟期を起点とする捕獲数の管理には反対。クマの出没は年度の差が大きくメカニズムも不明で予想が難しい。さらに大量出没について想定駆除数を上回る可能性は十分に考えられるので、狩猟部分の頭数は従来通り保険として温存すべき。有害駆除を減らすためということかもしれないが、できるだけ減らすのは常に実行すべきことで、起点の変更とは関係ない。「狩猟を優先するから有害駆除はよろしく」なる考え方があるとすれば保護計画のあり方に矛盾する。		有害捕獲については、捕獲許可要領等に基づいて、最小限の捕獲となるよう今後も適切に実施していきます。狩猟を優先することで、狩猟による個体数調整機能により、結果として有害捕獲が減少することが期待できると考えます。また、狩猟による過剰捕獲とならないよう、個体数のモニタリングを継続的に実施していきます。	D
27	【ツキノワグマ】春グマ猟を解禁しても良いと思う。他県が実施しているような予察駆除といった目先をごまかしたような表現で認めるのではなく、狩猟期を3月末まで延長して対応するのが良い。		春季捕獲については主に伝統猟法の維持の目的で、限定的に認めることとしています。ただし、伝統的猟法により春に捕獲を実施していた地域が限定されるため、予察捕獲と混同しないように、地域を限定して認めているものです。	C
28	【ツキノワグマ】生息状況に濃淡があるようだが、生息密度によって春グマ猟の条件緩和を認めるなど、市町村単位の細やかな対応があってしかるべき。		生息密度の濃淡はヘアトラップ調査でも明らかになっており、生息密度に応じた捕獲数の管理などに反映する必要があると考えます。しかし、生息密度は捕獲・餌条件等によって変動すると考えられるので、どのような生息密度に応じた管理としていくかは今後検討していきます。	D

29	<p>【ツキノワグマ】春グマ猟について、緩衝地帯及び生活環境地帯内に於いて厳格なルールの下で実施することに賛成する。</p> <p>理由：①人里依存型のクマ排除、及び銃を用いた捕獲に由りクマに対して人里への侵入が危険である事を教える効果が期待できる。銃に由る捕獲行為は全てのクマを捕獲する事は出来ない為、銃撃されたクマへの学習効果は大きいと考えます。春から秋に於いても捕獲方法を主に銃を用いた方法に変更し、併せて罠による捕獲も試みる様に変更する事を要望します。結果として人里依存型クマを少なくなり人間との軋轢が減少し、クマ保護に繋がると考えます。以前、岩手県に於いて春クマ猟が行われていた当時、有害捕獲に罠は用いられてはいませんでした。有害捕獲に罠を多用する事は結果として捕獲数の増大に繋がります。是非、再考を。</p> <p>②人里に侵入したクマを追う事が出来る猟師が激減している現状を改善する効果が期待できる。春クマ猟は狩猟技術と危険に対する対応力を先輩から若いハンターに伝承する良い機会を与える。</p>	<p>春季捕獲についてはご意見の通り適切な実施となるよう努めていきます。</p> <p>また、春季から秋季にかけての有害捕獲に銃を積極的に用いることは、ご意見の通りクマへの学習効果が期待できると考えます。銃を用いた有害捕獲については規制しておりませんが、安全性の確保などの観点から、多くの現場でわなが選択されている現状です。今後も有害捕獲が出来るだけ少なくなるよう、適切な基準で許可を実施していきます。</p>	D
----	---	---	---

30	<p>【ツキノワグマ】春季捕獲は熊の胆を高く売るためのもので、表向きの口実である秋のクマ被害の防止になるとは考えられません。クマにとっては理不尽で残酷な殺され方であり、過剰捕獲にもつながるのでやめてください。県は予察駆除はしないとうたいながら、一方で、予察駆除となる春季捕獲（＝春グマ狩り）を導入しようとしているのは矛盾しています。</p>	2	<p>春季捕獲はツキノワグマの個体群が全国的に危機的状況にあることを踏まえて、平成6年以降禁止されました。しかし、春季捕獲は伝統的に行われてきた猟法であり、今回実施を認める地域も、伝統的・歴史的に春季捕獲を含めた捕獲によりクマとの共生がなされてきた地域です。そのため予察捕獲ではなく、猟法の保全の目的で、地域を限定して認めようとするものです。</p> <p>また、過剰捕獲とならないよう、捕獲上限を設定し、適切な実施に努めていきます。</p>	E
31	<p>【ツキノワグマ】春グマ猟の復活について反対。銃器の性能が高いため、追払い効果は期待できない。残雪期のクマ狩りは難易度も低く伝統的とはいいがたく、強いていえば、山間部コミュニティのイベントの一つであろう。胆嚢の利用、売買は国内では問題なくとも、国際的には取引が規制されており、積極的に規制すべき。また、問題のない本来の生息域のクマの選択的捕獲も問題。</p>		<p>春季捕獲については主に伝統猟法の維持の目的で、限定的に認めることとしています。実施に当たっては、地域を限定し、被害状況、狩猟者の状況、クマの生息状況などのモニタリングを並行して実施し、効果を検証した上で適宜見直しを行なっていく必要があると考えます。</p>	D

32	【ツキノワグマ】自然は岩手の宝だと思います。「自然というものは無数の多様な動植物が互いに密接に関わりあって絶妙なバランスの上に成り立っている。自然を守るということは生物の多様性を守ることである。」とされています。人間がクマの数を決めてはいけません。クマは自然の象徴でクマが生存する、すなわち豊かな自然であるとも聞いています。捕獲数を増やさないでください。豊かな自然をこれ以上乱すこと無くさらに傷ついた部分を取り戻す工夫も必要だと思います。		有害捕獲については必要最小限となるよう、今後も努めていきます。	D
33	【ツキノワグマ】岩手県民として生物への思いやりに欠ける計画だと思う。人間の場合犯罪人でも簡単に殺すことはない。何もしていないクマを簡単に殺すことなどあってはなりません。長年岩手で生活してきて熊を殺すことは耳にするが、麻酔銃を使用したと聞いたことはない。クマなどに無駄な税金を使いたくないというのが本音。秋田県などはクマの保護に住民の理解をお願いしている。阿仁牧場の件がそう。ヒグマたちは殺されずにすんだ。とても気持ちが暖かくなった。岩手県民の特徴である思いやりに欠ける冷たい心の気質がそうさせるのか。絆と言う前に自然と他の動物達の絆ももっと大切にすべき。		有害捕獲においては、今後も被害を起こしている個体の特定に努めるなど、適切な実施に努めていきます。	D
34	【ツキノワグマ】有害捕獲したクマの原則奥山放獣体制を確立してください。	2	国有林等の放獣適地の確保や、捕獲時の麻酔および個体標識体制の整備など放獣の体制を整えていきます。	C

35	【ツキノワグマ】イノシシ、シカの増加に伴い、クマの錯誤捕獲の危険性が高まっている。錯誤捕獲個体の放獣義務、くくりわなの12cmルールの確認は記載すべき。くくりわなについてはクマが越冬体制に入ってからからの解禁とし、遅れた場合はその分延長するのが理想的。		錯誤捕獲個体の放獣及びくくりわなの規制については、本計画の上位計画である鳥獣保護事業計画に記載していますが、錯誤捕獲防止について周知を図る目的で、本計画にも記載します。	B
36	【ツキノワグマ】放射性物質検査の情報提供だけでは、狩猟が減少することが考えられる。狩猟を促進するような取り組みが必要。		狩猟は個体数管理の一翼を担っており、維持することが重要です。狩猟者の確保のために狩猟免許の講習などの取組を実施していきます。	C
37	【ツキノワグマ】狩猟者や狩猟奨励派だけを集めた検討会ではなく、自然保護団体や動物愛護団体、倫理学者、教育者など各方面の識者を入れ、県民の声を反映した公正な検討をすべきです。	2	生物多様性保全の理念に基づき、科学的・計画的な保護管理を実施するために、狩猟者のみでなく広く県民および学識経験者の意見を聞き公正に検討しています。	C
38	【ツキノワグマ】クマの保護を行うようになってから人身被害、農業被害が増加しており、山間部に住む者にとって受忍の限度を超えている。保護をすると決めた行政は保護に伴う被害に対して補償を行うべき。		保護管理計画は、保護だけでなく、人身及び農林業被害の防止と保護の両立をするために策定されているものです。被害に対しては、被害そのものを減らしていくよう取り組む必要があると考えます。	E

39	<p>【ツキノワグマ】新聞にも被害の記事が多く、クマが増えたように見られがちだが、温暖化やナラ枯れなどで植物の形態が変化し、それに頼っていた動物が数多く栽培されているデントコーンや果樹などを求めその地に定着した結果である。その結果、人目につくようになり、被害と受け止められがち。</p> <p>クマの目撃があるとハンターに頼るが、仕留められなければ頼りないと言われ、捕獲すると「かわいそう、他の方法があるだろう」と言われる。ハンターはクマからの被害を未然に防止し、万が一の時は捕獲する役である。単なる鉄砲打ちではなく、社会貢献も担っているということを理解していただきたい。</p>		<p>現状では有害捕獲に携わっているのは大部分が狩猟者であり、狩猟者が減少している近年では、多くの狩猟者にとって有害捕獲が負担となっています。ご意見の通り、クマの保護を重視する立場や被害を受けている立場の方から狩猟者に対する誤解がある場合があり、今回の計画には狩猟者および狩猟者団体の役割について記載しました。</p>	C
40	<p>【ツキノワグマ】 ツキノワグマは小さく臆病な動物で、しかも草食動物です。子どもを守る時人間が危害を加えようとした時にしか襲って来ません。そのへんをどうぞご理解ください。相手を思いやることが大切と言われている時代、口の利けない弱い相手を守ってください。</p>		<p>ご意見として参考にさせていただきます。</p>	D

41	<p>【ツキノワグマ】 250 キロにも及ぶ大河の「北上川」の源流を受け持つ岩手県の森は全ての生物の命の育む本源です。こんこんと水が湧き出る森が消えるとき、全ての産業、都市が消える、岩手県を世界が手本とする野生動物が住む豊かな森に取り戻すべきです。人間が人間だけの繁栄を画策した結果クマなどの多くの生物を絶滅させているのです。本当の森を作って行かないと生き残れないぞとクマが警告しているのではないのでしょうか。潜在自然植生を県民で作り、クマなどの動物や野鳥や昆虫に管理させるのが良いと思います。クマを殺して管理するのはあまりにも愛の無い方法論だと思います。戦後の植林政策の失敗を真摯に受け止め、杉や落葉松を被災地に格安に提供する法律を作り、その後を潜在自然植生の森にしていくことを提案いたします。</p>		<p>ご意見として参考にさせていただきます。</p>	D
----	--	--	----------------------------	---

※この他県外からも、392 名の方からご意見をいただきました。これらのご意見についても参考にさせていただき、一部計画に反映させていただきます。

備考 「決定への反映状況」欄には、次に掲げる区分を記載するものとします。

区 分	内 容
A（全部反映）	意見の内容の全部を反映し、計画等の案を修正したもの
B（一部反映）	意見の内容の一部を反映し、計画等の案を修正したもの
C（趣旨同一）	意見と計画等の案の趣旨が同一であると考えられるもの
D（参考）	計画等の案を修正しないが、施策等の実施段階で参考とするもの
E（対応困難）	A・B・Dの対応のいずれも困難であると考えられるもの
F（その他）	その他のもの（計画等の案の内容に関する質問等）